



Title	バントゥ諸語における自他動詞の派生関係 : スワヒリ語・マテンゴ語・ヘレロ語の場合
Author(s)	米田, 信子
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 2014, 25, p. 54-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72980
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

バントゥ諸語における自他動詞の派生関係 —スワヒリ語・マテング語・ヘレロ語の場合—

米田 信子

0. はじめに

「壊す」と「壊れる」のような対をなす他動詞と自動詞の派生の関係を、Haspelmath (1993)／Comrie (2006)は類型論的に以下の5つのタイプに分けている。

●一方からもう一方が派生しているもの

- ①使役化 (Causative : C) : 自動詞が無標で、そこから対の他動詞が派生する
- ②脱使役化 (Anticausative : A) : 他動詞が無標で、そこから対の自動詞が派生する

●一方からもう一方が派生しているのではないもの

- ③両極系 (Equipollent : E) : 同じ語根から両方とも派生している
- ④自他異形 (Suppletion : S) : 自動詞と他動詞で異なる語根が用いられる
- ⑤自他同形 (Labile : L) : 自動詞と他動詞が同形である

以下はComrie (2006:304)が挙げている上記の5つのタイプの日本語の動詞の例である。
矢印は派生の方向を示す。

- (1) 使役化 : a. 開ける [ak-e-ru] 他動詞 ← b. 開く [ak-u] 自動詞
- (2) 脱使役化 : a. 折る [or-u] 他動詞 → b. 折れる [or-e-ru] 自動詞
- (3) 両極系 : a. 壊す [kowa-s-u] 他動詞 ⇔ b. 壊れる [kowa-re-ru] 自動詞
- (4) 自他異形 : a. 殺す [koros-u] 他動詞 ≠ b. 死ぬ [sin-u] 自動詞
- (5) 自他同形 : a. 開く [hirak-u] 他動詞 = b. 開く [hirak-u] 自動詞

日本語では圧倒的に両極系派生が好まれるようであるが (Haspelmath 1993, Comrie 2006)、バントゥ諸語の自動詞と他動詞の対の派生関係にはバントゥ諸語としての類型的な類似点が見られるのだろうか。あるいは言語によって派生の方向性には違いが見られる

のだろうか。本稿では、Haspelmath (1993)／Comrie (2006)をもとに、バントゥ諸語の自動詞と他動詞の対にどのような派生関係があるのかを、スワヒリ語、ヘレロ語、マテング語の例から考察する。

1. スワヒリ語・ヘレロ語・マテング語の自他派生接辞

1.1 各言語の概要

スワヒリ語は、タンザニアやケニアをはじめとする東アフリカで広く話されている。アフリカ諸語のなかで最も研究されている言語でもある。エスノログ¹⁾によると話者数は1500 万人以上とされている。方言も多いとされるが、ここでは「標準スワヒリ語」と呼ばれている変種の例を用いる。ヘレロ語は、ナミビアを中心に、ボツワナ、アンゴラで話されている。ナミビアでは教育言語のひとつに定められており、教科書や辞書、文法書などが存在する。話者数は約 23 万人である。マテング語は、タンザニアの西南端で話されている。話者数は約 15 万人で、その多くはスワヒリ語との二言語使用者である。この言語は書記言語ではなく、語彙集 (Yoneda 2006) および筆者による記述研究以外には書かれた資料はない。バントゥ諸語には、名詞クラスとそれを基にした文法呼応システム、膠着性が高い動詞構造、といった共通した特徴があるが、スワヒリ語、ヘレロ語、マテング語もこれらの特徴を持っている。

動詞語幹は 3 言語とも以下のように構成される。

動詞語幹の構造： 動詞語根－（派生接辞－）末尾辞

いずれの言語でも、派生接辞を加えたり入れ替えることによって動詞の自他を交替させる。自動詞と他動詞の対の具体的な例を見ていく前に、各言語において対となる自動詞と他動詞に用いられる派生接辞を説明する。なお、本稿で「対」としているのは、「折る・折れる」のように、語根を共有する他動詞と自動詞であり、かつ、他動詞で対象となっているものが自動詞では主語になる、という関係が存在しているものである。したがって、適用形派生接辞²⁾によって他動詞化されたものと自動詞との関係は「対」とはみなさない。

¹⁾ SIL International の言語データベース(<http://www.ethnologue.com/>)。なお、ヘレロ語とマテング語の話者数もエスノログによる。

²⁾ 適用形派生接辞を付加された動詞は、基本的にはひとつ項が増え、それが目的語としてふるまう。そのため適用形派生接辞の付加は他動詞化のひとつと考えられることが多い (Mkude 2005 他)。以下は「泣く」という自動詞とそれを適用形にした例である。適用形の b では「私」が目的語になっ

1.2 スワヒリ語の自動詞と他動詞の対を作る派生接辞

スワヒリ語の他動詞を作る最も一般的な派生接辞は「使役形」と呼ばれる派生接辞である。スワヒリ語の使役形派生接辞には、*-ish-*と*-y-*の2種類があり、最も生産性が高いのは*-ish-*である。*-ish-*は語根の母音と母音調和を起こすため、語根の母音が *e, o* の場合には*-esh-*で現れる。*-y-*は語根末の音と融合して、以下のような現れ方をする。

語根末 *k, t* + *y* → *sh*

wak-*y*-a > washa 「燃やす」

pat-*y*-a > pasha 「通す」

語根末母音 + *y* → 母音 + *z*

shanga-*y*-a > shangaza 「驚かせる」

po-*y*-a > poza 「冷ます」

他動詞化に用いられるもう一つの派生接辞は*-u-*である。これは「他動詞反転形」と呼ばれる派生接辞で、英語の *undo* にあたるような機能を持つが、この機能の詳細についてはここでは省略する。語根の母音が *o* の場合には*-u-* は母音調和を起こして *-o-* で現れる。

スワヒリ語の自動詞を作る派生接辞には「状態形」の *-ik-* と「自動詞形」³⁾ の *-uk-* がある。いずれも母音調和を起こすため、*-ik-* は語根の母音が *e, o* の場合には *-ek-* で現れ、*-uk-* は語根の母音が *o* の場合には *-ok-* で現れる。

1.3 ヘレロ語の自動詞と他動詞の対を作る派生接辞

ヘレロ語においても他動詞を作る一般的な派生接辞は「使役形」と呼ばれるものである。

ているので、a の *li-a* 「泣く」と b の *li-li-a* 「～のために泣く」は、語根を共有している自動詞と他動詞ということになる。しかしここには「他動詞の対象が自動詞では主語になる」、という関係はない。したがって本稿で扱う「対」ではない。

i) a. Maria a-na-li-a. 「マリアは泣いている。」

b. Maria a-na-ni-li-li-a 「マリアは私のために泣いている」

³⁾ 他動詞反転形の対になる自動詞に *-uk-* が用いられることから、*-uk-* は「自動詞反転形」と呼ばれることもあるが (Schadeberg (1992)、実際には「反転」に限らず広く自動詞を派生させていることから本稿では「自動詞形」と呼ぶことにする。

ヘレロ語の使役形派生接辞には *-is-*, *-ek-*, *-z-* の3種類がある(Möhlig & Kavari 2008)⁴。このうち最も生産性が高いのが *-is-* である。またヘレロ語にも「他動詞反転形」と呼ばれる派生接辞がある。ヘレロ語の他動詞反転形派生接辞は *-ur-* で、語根の母音が *o* の場合には *-ur-* は母音調和を起こして *-or-* で現れる。

自動詞を作る派生接辞は「状態形」の *-ik-* と「自動詞形」の *-uk-* である。*-uk-* は語根の母音が *o* の場合には母音調和を起こして *-ok-* で現れる。

1.4 マテング語の自動詞と他動詞の対を作る派生接辞

マテング語にはスワヒリ語の *-ish-* やヘレロ語の *-is-* にあたる使役形派生接辞がない。マテング語の他動詞化の派生接辞には、*-ul-*, *-u-*, *-il-*, *-i-* がある(米田 2000a, 2000b)。また、これらの派生接辞を付ける以外に「自動詞の語根末子音を脱落させる」という他動詞化が見られる。これは、後述する派生接辞 *-uk-*, *-ik-* が付いている自動詞と対になる他動詞に *-u-*, *-i-* が付いていることが多く、ここに見られる「自動詞の語根末子音の脱落」という表面的な現象が他動詞化の手段として用いられるようになったのではないかと推測できるが(米田 2000a, 2000b)、詳しいことはわかっていない。*-ul-* と *-il-* は、それぞれ *-u-*, *-i-* と置き換えが可能な場合もある(表1では1を()に入れて表している)。

マテング語の自動詞化に用いられる派生接辞は *-ik-*, *-uk-*, *-al-*, *-at-* である。*-ik-* と *-uk-* はそれぞれスワヒリ語やヘレロ語の「状態形」と「自動詞形」にあたる派生接辞である。*-al-* と *-at-* は生産的ではなく、限られた動詞にのみ用いられている。

これらの派生接辞は、*-i-* を除いていずれも語根の母音と母音調和を起こす。*-il-*, *-ik-* は語根の母音が *e, o* の場合は *-el-*, *-ek-*、*ε, ɔ* の場合は *-ɛl-*, *-ɛk-* で現れる。*-ul-*, *-u-*, *-uk-* は、語根の母音が *e, o* の場合は、それぞれ *-ol-*, *-o-*, *-ok-*、語根の母音が *ɔ* の場合はそれぞれ *-ɔl-*, *-ɔ-*, *-ɔk-* で現れる。*-al-* と *-at-* の母音は語根(頭)の母音と同じ母音で現れる。

2. 30 対の自動詞と他動詞

Haspelmath (1993) は 31 対の自動詞と他動詞(厳密には自動詞と他動詞のなかでも特に起動動詞(inchoative verb)と使役動詞(causative verb)の対)の例を 21 言語から集め、対

⁴ Möhlig & Kavari (2008) では *-is-*, *-ek-* は末尾辞の *-a* を含めて *-isa*, *-eka*, *-z-* と挙げられているが、本稿では派生接辞と末尾辞を分けて考えいるため、それに合わせた表記とする。*-z-* に関しては筆者とは異なる解釈であるが、語彙的に固定した限られた現れ方しかせず、本稿で扱う自他動詞には直接関係しないので、ここでは Möhlig & Kavari (2008) のままの表記にしておく。

をなす自動詞と他動詞の派生関係の類型化を行った。そこに挙げられた派生関係は、先にも述べたとおり、①自動詞が無標で、そこから対の他動詞が派生する対をなす使役化、②他動詞が無標で、そこから対の自動詞が派生する脱使役化、③自動詞も他動詞も派生している両極系、④自動詞と他動詞が異なる語根の自他異形、⑤自動詞と他動詞が同形の自他同形、という5つの派生タイプに分けられる。さらに Comrie(2006:305)は自動詞の自発性と自他動詞の有標性の関係を調べるために、Haspelmath (1993)が提案した31対を自発性の高いものから並べ替えている。

表1は Comrie(2006)が並べ替えた31対から「31. die/ kill (死ぬ・殺す)」を除いた30対の自他動詞に該当するスワヒリ語、ヘレロ語、マテング語である。なお、マテング語は、「2. freeze (凍る・凍らせる)」と「19. develop (発展する・発展させる)」にあたるデータが収集できなかったため、28対となっている。

2.2 ~2.4 で示した各言語の他動詞化と自動詞化に用いられる派生接辞を見てもわかるように、これら3言語には似たような派生接辞が存在する。しかしながら表1を見ると、それらの派生接辞が必ずしも同じように用いられているわけではないことがわかる。

「27.open (開く・開ける)」のようにそれらの派生接辞が3言語とも同じように用いられている動詞がないわけではないが、むしろそのような例はわずかである。「5. put out (消す・消える)」は3言語がそれぞれ異なる派生をしている例である。スワヒリ語では他動詞から自動詞を派生させているのに対し、ヘレロ語では自動詞から他動詞が派生している。またマテング語ではひとつの語根から他動詞も自動詞も派生している。

(6) open	「開ける」		「開く」	
a. スワヒリ語	a. fung -u -a	⇔	b. fung -uk -a	両極系
b. ヘレロ語	a. patur -ur -a	⇔	b. patur -uk -a	両極系
c. マテング語	a. hog -ok -a	⇔	b. hog -ok -a	両極系
(7) put out	「消す」		「消える」	
a. スワヒリ語	a. zim -a	→	b. zim -ik -a	脱使役化
b. ヘレロ語	a. zem -is -a	←	b. zem -a	使役化
c. マテング語	a. sus -u -a	⇔	b. sus -uk -a	両極系

表 1 : Comrie (2006) 30対自他動詞 スワヒリ語・ヘレロ語・マデング語の例

自他動詞	スワヒリ語			ヘレロ語			マデング語		
	自動詞	他動詞	type	自動詞	他動詞	type	自動詞	他動詞	type
1 沸く・沸かす	chemk-a	chemk-y-a > chemsha	C	sum-a	sum-is-a	C	bel-a	be-a	C
2 凍る・凍らせる	gand-a	gand-ish-a	C	kukut-a	kukut-is-a	C	N/D	N/D	-
3 乾く・乾かす	kauk-a	kauk-y-a > kausha	C	kah-a	kah-is-a	C	jom-a	nyah-a	S
4 起きる・起こす	amk-a	amk-y-a > amsha	C	pend-uk-a	pend-ur-a	E	jim-uk-a	jim-u-a	E
5 消える・消す	zim-ik-a	zim-a	A	zem-a	zem-is-a	C	sus-uk-a	sus-u-a	E
6 沈む・沈める	zam-a	zam-ish-a	C	nini-w-a	nin-is-a	E	sul-a	su-a	C
7 教わる・教える	ii-funz-a	funz-a	A	ri-hong-a	hong-a	A	li-bool-a	bool-a	A
8 解ける・解かす	yeyuk-a	yeyuk-y-a > yevusha	C	zuz-uk-a	zuz-ur-a	E	nyung'any-uk-a	nyung'any-u(l)-a	E
9 止まる・止める	simam-a	simam-ish-a	C	kuram-a	kuram-is-a	C	iem-a	iem-ek-a	C
10 回る・回す	zunguk-a	zunguk-y-a > zungusha	C	kondorok-a	kondorok-is-a	C	hjongal-ok-a	hjongal-o(l)-a	E
11 溶ける・溶かす	yeyuk-a	yeyuk-y-a > yevusha	C	tungan-a	rungan-is-a	C	nyung'any-uk-a	nyung'any-u(l)-a	E
12 集める・集がす	ung-uk-a	ung-u-a	E	ningirir-a	ningirir-is-a	C	tin-ik-a	tin-i-a	E
13 壊れる・壊す	bom-ok-a	bom-o-a	E	yandek-w-a	yandek-a	A	kaj-uk-a	kaj-ul-a	E
14 満ちる・満たす	ja-a	ja-y-a > jaza	C	ur-a	ur-is-a	C	pat-ik-a	pat-il-a	E
15 終わる・終える	maliz-a	maliz-a	L	vaand-a	man-a	S	jom-ok-a	jom-ol-a	E
16 始まる・始める	anz-a	anz-a	L	ut-a	ut-a	L	tumb-uk-a	tumb-ul-a	E
17 広がる・広げる	ene-a	ene-y-a > eneza	C	nyotor-ok-a	nyotor-or-a	E	hatamb-uk-a	hatamb-ul-a	E
18 転がる・転がす	bingir-ik-a	bingir-ish-a	E	randat-a	randat-is-a	C	hingal-ik-a	hingal-il-a	E
19 発達する・させる	endelea	endele-y-a > endeleza	C	kur-a	kur-is-a	C	N/D	N/D	-
20 なくなる・なくす	pote-a	pote-y-a > poteza	C	pandiar-a	pandiar-is-a	C	hob-a	ho-a	C
21 上がる・上げる	pand-a	pand-ish-a	C	rond-a	rond-is-a	C	kwel-a	tondabe-a	S
22 良くなる・良くする	pon-a	pon-y-a	C	veruk-a	veruk-is-a	C	lam-a	lam-i-a	C
23 揺れる・揺らす	pembe-a	pembe-z-a	C	nyinganying-a	nyinganying-is-a	C	nyuk-a	nyu-a	C
24 繋がる・繋げる	ung-ik-a	ung-a	A	ri-kut-a	kut-a	A	mamat-ik-a	mamat-ik-a	L
25 変わる・変える	geuk-a	geuk-y-a > geuza	C	tana-uk-a	tana-ur-a	E	(bali-ik-a)	(bali-is-a)	(E)
26 集まる・集める	kusany-ik-a	kusany-a	A	worongon-a	worongon-is-a	C	jol-ok-a	jol-a	A
27 開く・開ける	fung-uk-a	fung-u-a	E	patur-uk-a	patur-ur-a	E	hog-ok-a	hog-ol-a	E
28 折れる・折る	vunj-ik-a	vunj-a	A	te-ek-a > teka	te-a > teya	A	tun-uk-a	tun-ul-a	E
29 閉まる・閉める	fung-ik-a	fung-a	A	pat-a	pat-a	L	jig-il-a	jig-il-a	L
30 裂ける・裂く	chan-ik-a	chan-a	A	han-ik-a	han-a	A	bal-uk-a	bal-ul-a	E

表1が示すように、自動詞と他動詞のどちらが基本形になっているのか（あるいはどちらも基本形ではない）ということには言語によってかなり違いがあることがわかる。

表1に挙げた自動詞と他動詞の対を派生関係別に数えると以下ようになる。

表2：各言語の30対の派生関係

	スワヒリ語	ヘレロ語	マテング語
C：使役化派生	18	16	6
A：脱使役化派生	7	5	3
E：両極系派生	3	6	16
S：異形型	0	1	2
L：同形型	2	2	1
計	30	30	28

3言語とも異形型⁵と同形型が少ないという点は共通しているが、それ以外のところでは、マテング語とその他の2言語とに大きな傾向の違いが見られる。

スワヒリ語とヘレロ語については使役化の対が圧倒的に多い。つまり基本（無標）となるのは自動詞で、その自動詞に使役形派生接辞を付けることによって対の他動詞が派生しているケースが半数以上を占めている。それに対してマテング語では使役化は6対しかなく、全体1/4にも満たない。これはマテング語に使役形派生接辞がないことを考えると当然とも言える結果だろう。スワヒリ語の使役化は、6対のうち他動詞化の派生接辞を付けているのは2対のみで、あとの4対は自動詞の語根末子音を脱落させて他動詞化している。

脱使役化については、対の数からはスワヒリ語とヘレロ語に大差がないように見えるが、スワヒリ語が7対のうち6対で状態形派生接辞を付けることによって自動詞化しているのに対して、ヘレロ語のほうは2.3で挙げた状態形の派生接辞を用いている例は2対だけである。それ以外は(8)や(9)のように動詞語幹の前に「自分を」という再帰目的語接辞を付けたり、(10)のように受動形派生接辞を付けることで自動詞にしている。

⁵ マテング語のデータはすべて Yoneda (2006) から抜き出したものである。異形の2対のうち「3. 乾かす・乾く」の「乾かす」として挙げているのは「乾かすために火に近づける」と「干す」という意味の動詞である。いずれも「乾かす」というよりも乾かすための具体的な動作を表す動詞であり、これらの動作の目的でもある「乾かす」を表す動詞は挙げられていなかった。ただし「乾く」という自動詞と語根を共有する他動詞が存在しないということが確認できているわけではない。

ヘレロ語

- (8) a. hong-a 「教える」
 b. ri-hong-a 「学ぶ」 < 「自分自身を教える」 ri- は再帰目的語接辞
- (9) a. kut-a 「繋げる」
 b. ri-kut-a 「繋がる」 < 「自分自身を繋げる」
- (10) a. yandek-a 「壊す」
 b. yandek-w-a 「壊れる」 -w- は受動形派生接辞

マテング語でも脱使役化は 3 対しかないが、そのうち 2 対は再帰目的語接辞を用いており、派生接辞を付加して脱使役化しているのは「26. gather (集める・集まる)」の 1 対のみである。ちなみにマテング語には受動形派生接辞がない。したがってヘレロ語のような受動形派生接辞を付ける自動詞化はできない。

マテング語では両極系の派生が最も多い。使役形派生接辞を持たないマテング語においては、スワヒリ語とヘレロ語における使役化の対とほぼ同数の対が両極系の派生をしている。スワヒリ語とヘレロ語の両極系の派生に用いられる派生接辞の対は、ヘレロ語の 1 対を除いて、いずれも他動詞反転形派生接辞と自動詞形派生接辞の対、すなわちスワヒリ語では -uk- と -u-、ヘレロ語では -uk- と -ur- の対のみである。一方、マテング語では、他動詞反転形派生接辞と自動詞形派生接辞の対だけでなく、-uk- と -u-、-uk- と -ul-、-ik- と -il-、-ik- と -i- など複数の組み合わせが見られる。表 1 の「26. change (変わる・変える)」はスワヒリ語からの借用語⁶で、ここでは他動詞にマテング語には元来なかった使役形派生接辞 -is- (< -ish-) が用いられている。

スワヒリ語、ヘレロ語、マテング語の派生関係を比較してみると、同じバントゥ諸語でも、使役形派生接辞を持つスワヒリ語やヘレロ語と、使役形派生接辞を持たないマテング語とでは、派生関係の傾向に大きな違いがある。スワヒリ語とヘレロ語は使役化派生の傾向が強いのに対し、マテング語は両極系派生の傾向が強い。さらに、スワヒリ語とヘレロ語では使役化が多いという点は共通しているが、脱使役化については、ヘレロ語はスワヒ

⁶ < badirika 「変える」・badirisha 「変わる」(スワヒリ語)。ただしこの動詞はもともとアラビア語からの借用語であり、表 1 のスワヒリ語の動詞には、バントゥ諸語の本来語であると思われ、また Haspelmath (1993) も挙げている動詞 geuka 「変わる」・geuza 「変わる」を挙げた。

リ語ほど安定的（もしくは生産的）に行われていないように思われる。また、他動詞反転形派生接辞と自動詞形派生接辞は3言語ともに見られる派生接辞であり、これらが対をなしていることも共通しているが、これらが用いられている動詞の対が必ずしも一致していないことは興味深い。

3. Haspelmath (1993)／Comrie (2006)との比較

さて Haspelmath (1993) の 21 言語のなかにはスワヒリ語も含まれており、そこに挙げられているスワヒリ語の 31 対の自動詞と他動詞の派生関係は以下のような分布になっている(Haspelmath 1993:101)。

表 3: スワヒリ語の 31 対の派生関係の分布 —Haspelmath (1993)との比較—

	C : 使役化	A : 脱使役化	E : 両極系	S : 異形	L : 同形
Haspelmath	11	11	8	1	0
本稿のデータ	18	7	3	1	2

表 3 が示すように、Haspelmath (1993)が挙げているデータと筆者のデータはかなり異なっている。このような違いが生じた最も大きな理由は Haspelmath (1993)では通時的もしくは音韻論的な考慮がなされていないためである。たとえば以下のような例である。

- (11) a. amsh-a < amk-y-a 「起こす」
 b. amk-a 「起きる」
- (12) a. chemsh-a < chemk-y-a 「沸かす」
 b. chemk-a 「沸く」

これらの例は、表層的には共通する語根から他動詞には-sh-自動詞には-k-という派生接辞が付いているか、あるいは他動詞と自動詞で語根末の子音が交替している(sh と k の交替)ように見える。つまり一方からもう一方が派生しているわけではなく、両極系派生のように見えるため、Haspelmath(1993) ではこれらの対は両極系の派生として扱われている。しかしながら 2.2 で述べた k + y → sh という通時的な音韻変化は、動詞の派生に限らず名詞の派生などにも見られ、スワヒリ語においては極めて規則的な音韻交替である(Ashton 1947、

Polomé 1967、Schadeberg 1992 他参照)。これらは両極系派生ではなく、自動詞に使役形派生接辞 *-y-* が付いた自動詞からの派生、すなわち使役化である。

また、本稿で両極系派生として扱っている以下のような例が Haspelmath(1993) では脱使役化として扱われている。

- (13) a. *fung-u-a* 「開ける」
 b. *fung-uk-a* 「開く」
 cf. c. *fung-a* 「閉める」

確かにこれらも表層的には *fungu-a* という他動詞に *-k* をつけた自動詞化、すなわち脱使役化のようにも見えるのだが、これは *fung-a* 「閉める」に他動詞反転形派生接辞 *-u* が付いた *fung-u-a* と自動詞派生接辞 *-uk-* が付いた *fung-uk-a* との対であり、両極系派生として扱うべきであろう。

Haspelmath (1993)ではスワヒリ語の派生関係は使役化と脱使役化が同等の割合で起きていることになっているが、通時的もしくは音韻論的に派生の関係の詳細を見ていくと、スワヒリ語には使役化の傾向があることがわかる。

さて Comrie (2006)は、自動詞の自発性が高いものほど無標となる動詞が自動詞であり、自発性が低くなれば他動詞のほうが無標になるという仮説を立てている。つまり自発性の高い順に並べられている表 1 では、上のほうが使役化が多く、下に行くほど脱使役化が多くなるという仮説である。使役化も脱使役化も最初から数が限られているマテンゴ語をのぞき、スワヒリ語とヘレロ語について 30 対を前半 1~15 と後半 16~30 に分けて使役化と脱使役化の対数を数えたところ、以下のような結果となった。

表 4: スワヒリ語とヘレロ語における脱使役化と使役化の分布

	スワヒリ語		ヘレロ語	
	1~15	16~30	1~15	16~30
A : 脱使役化	2 (4)	5 (7)	2	3
C : 使役化	11 (5.5)	7 (6)	9	7

スワヒリ語の欄に()付の数字を挙げているのは、Comrie (2006:309)が挙げている Haspelmath(1993)のデータから割り出したスワヒリ語の各対数である。Comrie (2006)は使役化の対数が前半よりも後半のほうがわずかに多いことから、スワヒリ語を上記の仮説の「例外」として扱っている Comrie (2006:309)。しかしながら、表4が示すとおり、通時的視点を考慮した本稿のデータでは、使役化は前半が11対あるのに対し、後半は7対となっており、スワヒリ語も例外ではないことがわかる。さらにヘレロ語においても、スワヒリ語ほど明確ではないが、Comrie (2006)の仮説を裏付ける結果となっている。

4. おわりに

Haspelmath(1993)/Comrie (2006)をもとに、スワヒリ語、ヘレロ語、マテンゴ語における自動詞と他動詞の対の派生関係を見てきた。同じバントゥ諸語ではあるが、使役形派生接辞を持つスワヒリ語やヘレロ語と、使役形派生接辞を持たないマテンゴ語とでは、派生関係の傾向に大きな違いがあることが明らかになった。スワヒリ語とヘレロ語では使役化、マテンゴ語では両極系派生がそれぞれ半分以上を占めている。脱使役化については、スワヒリ語では状態形派生接辞を用いた自動詞化が規則的に見られたのに対し、ヘレロ語やマテンゴ語では規則的な脱使役化がほとんど見られない。また、マテンゴ語に使役形派生接辞がないことをのぞけば3つの言語には同じような自他の派生接辞があるにもかかわらず、これらの用いられ方には言語によって差があることも明らかになった。本稿では、対となる自他動詞の派生の方向のみを問題にしてきた。最後に動詞の有標性と自発性との関わりについてわずかに触れたが、ここでも派生の方向を見ただけで、用いられている派生接辞と無標となる基本形の意味との関係についてはほとんど議論をしていない。今後は自動詞化もしくは他動詞化の方向だけでなく、そこで用いられている派生接辞の種類別に分布を調べ、自発性との関係など詳しく調べていく必要があると考えている。

* 本稿は2013年度科学研究費補助金 基盤研究(C)「バントゥ諸語における名詞修飾形式と意味関係に関する記述言語学的研究」(課題番号 25370475 研究代表者: 大阪大学 米田信子) および2013年度科学研究費補助金 基盤研究(C)「ニジェール・コンゴ語族における動詞構造と統語に関する類型論的研究」(課題番号: 25370477 研究代表者: 大阪大学 小森淳子) の成果の一部である。

参考文献

- Ashton, E. O. 1947. *Swahili Grammar*. (2nd edition), Essex: Longman.
- Comrie, Bernard. 2006. Transitivity pairs, markedness, and diachronic stability. *Linguistics*. 44(2). 303–318.
- Haspelmath, Martin. 1993. More on the typology of inchoative/causative verb alternations. In: Bernard Comrie and Maria Polinsky (Eds.) *Causative and transitivity*. 88-120. Amsterdam: John Benjamins.
- Mkude, Daniel J. 2005. *The Passive Construction in Swahili*. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.
- Möhlig, Wilhelm J.G. and Jekura U. Kavari. 2008. *Reference Grammar of Herero (Otjiherero)*. Köln: Rüdiger Köppe Verlag.
- Polomé, Edgar C. 1967. *Swahili Language Handbook*. Washington: The Center for Applied Linguistics.
- Schadeberg, Thilo C. 1992. *A Sketch of Swahili Morphology*. Köln: Rüdiger Köppe verlag.
- Yoneda Nobuko. 2006. Vocabulary of the Matengo Language. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.
- 米田信子. 2000a 「マテング語の他動詞と自動詞に関する試論－形態による分類を中心に」『スワヒリ&アフリカ研究』10、183-198.
- . 2000b 『マテング語の記述研究（バンツー系、タンザニア）－動詞構造を中心に－』博士論文、東京外国語大学